

## イギリスの茅葺き民家と茅葺きトレーニング

田中 麻里

群馬大学教育学部家政教育講座

(2004年9月22日受理)

## The Thatched Houses and Thatch Training in England

Mari TANAKA

Department of Home Economics, Faculty of Education, Gunma University

Maebashi, Gunma, 371-8510, Japan

(Accepted September 22, 2004)

### 1. はじめに

日本では古代より植物性の葺き材である草葺き、板葺き、樹皮葺きなどがみられ、なかでも茅葺きは古代より住宅に限らず社寺などあらゆる建物に用いられてきた。古墳時代の埴輪や家屋文鏡に描かれた住居の屋根も茅葺きであると考えられている。

茅とはススキ、チガヤ、スゲなどイネ科、カヤツリグサ科の大型草本を指す。日本では茅葺きの材料としては山林原野に生えるススキ（山茅）が最も一般的であるが、河川敷や湖沼近くの湿地帯では葦（海茅）が盛んに利用された。村人が共有する茅場があり、共同で管理してきたが、次第に茅葺き民家の戸数が減り共同管理の形態が崩れてきた。最近では茅場を再度、すぐれた自然環境の一形態として見直し、保全しようとする活動が展開されつつある<sup>i</sup>。茅以外にも藁や麦藁、笹や麻殻を利用する地域もある。こうした茅類は秋から冬にかけて、枯れた状態で刈り取り、冬の間乾燥させる。春になると各戸の天井裏に運び入れ必要な時期まで保管する。現在では共同で保管するための茅取蔵庫を建設する動きもある<sup>ii</sup>。

職人は全般的に高齢化しており、宮城や京都、大阪などでは若手職人の育成が行われているが、組織的なものではなく茅葺きを請け負う工事会社が独自に取り組むものである<sup>iii</sup>。

2001～2002年にかけて都市農山漁村交流活性化機構が実施した全国茅葺き民家の数量把握調査によると、数千軒の茅葺き民家が存在するという。昨今、日本においては民家の再生ブームも起こり、茅葺き民家は貴重な文化遺産であり、価値あるものとして再認識されつつあるが、葺き替えにおいては、茅の調達や職人の手配も容易ではなく、コスト面をはじめ今なお多くの困難を抱えてい

る。

一方、イギリスにおいても茅葺き民家は古くからみられる。イギリスはイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドからなる連合王国で、いずれの地域においても、多くの民家が豊かな田園風景を構成する要素として残され、住み続けられている。イングランドではすでに1960年代以降、茅葺き民家は非常にステータスのあるものとして認識される価値転換が起こり、現在では多くの不動産仲介業者において住宅売買の対象として茅葺き民家の物件が取り扱われている。そして茅葺き職人のリストもイエローページで簡単に探すことができる。イングランド南部のケント州では景観保全のため新築民家の一定割合を茅葺きとする条例なども制定されている。日本とは茅葺き材料の種類やその調達方法、葺き方技術の点などで異なるが、イングランドにおいてユニークな試みとして、茅葺き民家を維持管理していくため政府が職人のトレーニングコースを立ち上げ積極的に取り組んでいることがあげられる。

そこで、本稿ではイングランドの茅葺き民家およびその維持管理を支える重要な役割を担っている茅葺きトレーニングの歴史の変遷および現状について明らかにする。イングランドの茅葺きに関する文献として、イングリッシュ・ヘリテージが2000年に発行した2冊のレポートが大変優れている<sup>iv</sup>。これはイギリス茅葺きの考古植物学研究の第一人者ともいわれるジョン・レッツ博士が共著者とともに、これまで明らかにされてこなかった統計調査資料や多くの公文書などをもとに、茅葺き材の種類や生産方法、供給形態や耐久性に対する認識の変化などを示し、職人組織やトレーニングの方法などの変遷について取りまとめたものである。これらの文献資料を基礎とし、2003年7～9月の茅葺き民家の現場見学、2004年1月14日および2月6日にトレーニングが実施されているイングランド・ノーザンプトン州にあるナストン・ホールにおける実習見学、および指導者、実習生へのヒアリングをもとに考察を行う。

文献資料およびトレーニングともにイギリス全土を対象としたものではなく、イングランドを対象としているため、本稿においてもイングランドを研究対象とする。

## 2. イギリスの茅葺き民家

イングランドには2000年1月時点で24,059軒の茅葺きの登録文化財がある。かつては農村住居のほとんどが麦藁葺きであった。麦藁葺きの場合、古茅の上に新茅を載せて葺いていくため、最下層には中世の時代の茅が残っている場合もみられる。茅葺きの材料として、かつては地域に身近であったヒースやスゲ、第二次世界大戦前によく使われていたライ麦など様々な材料が使われていた。今日では主要な茅葺き材は3種類、麦藁 (Long Straw)、葦 (Water Reed)、梳いた小麦藁 (Combed Wheat Reed) となっている (写真1、2)。そして、1940年にはこれらの材料のうち1種類しか葺くことができなかった職人も、今日では2種類の材料で葺くことができるようになった。とくに次章で述べるナストンホールでの茅葺きトレーニングにおいて2種類以上の材料を葺く能力を身につけさせ、資格が取得できるようになったことが大きい。イギリス全体での茅葺き職人の数は不明であ

るが、茅葺き会社の数は約 900 社といわれ、職人 2~3 人で構成される小規模会社がほとんどである。次にイングリッシュ・ヘリテージのレポートをもとに主要な茅葺き材の変遷についてみていく。

### (1) 麦藁 (Long Straw)

麦藁とは小麦の藁で、平均して 75~90cm の長さの茎状のもので、脱穀の程度によって柔軟性は様々である。1940 年以前は、茅葺き用の麦藁は穀物生産の副産物であり、茅葺き民家や農場の建物なども農業廃棄物である藁をうまく利用して葺かれていた。しかし 1940 年以降の農業の変化によって、穀物生産と茅葺き用麦藁の生産は切り離されたものとなった。小麦の品種改良や人工肥料の使用、収穫機の発達は全て茅葺き用藁の供給に大きな変化をもたらし、現在では茅葺き用の麦藁は特別な作物として育てられている。1940 年以前は茅葺き職人は自分が働いていた農場から直接、あるいは地域の藁仲介者を通して麦藁を入手していた。現在では、昔ながらの機材を使って特別な作物として生産された麦藁を直接農場から入手したり、茅葺き職人が土地を借りて材料を自ら栽培している場合もある。また、現代的な機械を用いて生産された麦藁を使う場合もある。1994 年以降は海外からも輸入されるようになり、様々な供給方法によって麦藁が調達されている。

麦藁は 3 種類の材料のなかで最も熟練技術を要する。葦や梳いた小麦藁などは束ねた材料を屋根上に載せて小舞に打ち付けていくが、麦藁葺きの場合にはイェルミング (Yealming) と呼ばれる屋根へ載せるための、地上での労働集約的な準備を必要とするからである。かつて多くの職人がこの工程を行うことができたが、現在では非常に限られた職人だけが行うことができる。1965 年の地方産業局の非公開の公文書によると、麦藁を葺ける職人は 74%、同じく葦 37%、梳いた小麦藁 55%となっている<sup>v</sup>。実際、100~150 年前までは、葦が使われていたのは葦が豊富に自生する東アングリア地方だけであって、ほとんどの地域が麦藁であった。栽培された麦藁を運搬しなければならない現代では、束ねて運搬できる葦や梳いた小麦藁よりも輸送コストがかかるという欠点もある。

1940~1980 年代まで、麦藁は葦や梳いた小麦藁と比較して耐久性に劣るといふ悪評価に苦しんできた<sup>vi</sup>。農業とは全く関係のない人々が茅葺き民家を所有することによって、耐久性が材料選択の最も重要な要因となった。しかし、実際にはどの材料が最も優れているかということは一概には言えない。作物のできばえや天候との関係、風や樹木との関係、熟練職人が葺いたか否か、など様々な要因によって耐久性は異なるからである。麦藁は葦や梳いた小麦藁とは外観が大きく異なり、葦や梳いた小麦藁は角張った、はさみでカットされたような外観を持つのに対して、麦藁は整ったというよりは「もじゃもじゃ」と表現されるような自然な柔らかさもつ。近年では麦藁葺きが多かった地域では、真のバナキュラー民家のような雰囲気を持つ麦藁葺きが復活されるようになってきた。

### (2) 葦 (Water Reed)

葦もまた中世から使われていた材料である。最も主要な産地はノーフォーク (Norfolk) で、それ以外にも地元の葦畑などから収穫される。ノーフォーク産は全需要の 1/4 程度を産出しているが、大部分はトルコやハンガリー、東欧などからの輸入に頼っている。本格的な輸入が始まったのは戦後 1950 年頃であるが、戦前にも若干の輸入の形跡はあった。1970~1987 年にかけて輸入が急増し現

在も続いている。葦は3種類の材料の中で最も商品として流通してきた歴史を持つ。しかし輸入葦の供給には、政治の変化や為替変動、質の保証の点において、常に不安がつきまとう。

葦は梳いた小麦藁と同様に、束ごと屋根にあげられ、垂木に鉄製のフックを打ち込んで、茅上を鉄筋で留めて厚さ30cmに葺いていく。表面はレグットと呼ばれる道具で叩いて平らにして整える。葦を使うメリットとして、他の2種類の材料よりも速く葺くことができ作業効率が良いため年間を通して多くの仕事ができる、小麦藁よりも技術を必要とせず葺ける、天気に左右されるものの価格が比較的安定していること、代理店などを通して購入すればどんな時期でも供給がとぎれる心配がない、などである。葦は保存の問題に関係なく、商業ベースの理由から好んで使われている。

### (3) 梳いた小麦藁 (Combed Wheat Reed)

梳いた小麦藁は Combed wheat reed と呼ばれ、小麦藁葺きに使用されるのと同種の小麦の藁を用いるにもかかわらず、Reed (葦) の名前がついているのは、葦の取り付け方法と似ていて屋根外観も葦と似ているからである。梳いた小麦藁は穀物を取り除いて藁を堅くしておいて、先端と根本を揃え横たえて脱穀し、葦梳き機に取り付けて行われる。取り付けの方法は葦と似ており、葦よりも迅速ではないものの小麦藁に比べると労働集約的ではない中間的な特徴をもつ。

## 3. ナストンホールでの茅葺きトレーニング

### 3.1 歴史的経緯

イギリスでは1921年11月に農業および地方産業 (Rural industry) の支援と開発を目的とした地方産業局 (Rural Industries Bureau) が設立された。地方産業局が対象とするものには、かご作りやウェールズの羊毛産業、馬具製造業、そして小規模な農業工業などがあり、1940年から茅葺きもその一つと位置づけられたが、近代化、機械化を進めようとする開発の目的からすると茅葺き是非常に取り扱いにくいものであった。電話なども十分に普及していない時代、現場の梯子に登り、茅葺き職人から仕事の見積方法などを聞き出すのは容易なことではなかったという。

茅葺きのトレーニングコースは1965-66年に開始された。きっかけはノーザンプトン州 (Northamptonshire) で親方について茅葺きを学んでいた見習い職人からの要請であった。彼は茅葺きという仕事は他の手職と違って、親方からの教えを補完するため夜間学校へ行くことができないと指摘した。それを受けて、地方産業局の幹部で、茅葺き職人親方組合から移籍してきたグラハム・キャッスルがコースのための場所としてナストン・ホールをみつけてきた。ナストンホールは産業革命時代に紡績機械の発明で富豪となったロバート・アークライト卿の邸宅で、現在はノーザンプトン州の施設である (写真3)。初年度は特別コースとして葦 (Norfolk Reed) の実習を見習い職人に対して実施した。翌年 (1966-67) は4人の見習い職人と3人の親方を対象として、宿泊しながら葦のトレーニングを行った。葦を使い実物大の屋根模型を用いた実践的なトレーニングは1971年まで続いた。

現在、茅葺きのトレーニングコースは、地方産業局から名称変更した地域開発委員会 (Rural

Development Commission) という環境省下におかれた政府機関によって実施されている。ノーザンプトン州にあるナストンホールは、広い農場に囲まれた小高い場所に館が建ち、その側面に納屋などの附属建物があり、主館は約 200 年前に建設された石造 3 階建ての建物で、保存建築物となっている。内部は事務所やホール、食堂、各講座の受講生の宿泊施設として利用されている。ナストン・ホールでは随時さまざまな講座が開講されており、絵画やレース編み、木工やパソコンなど各講座は、たいいてい受講生が食事つきで宿泊することを想定した日程で開講されている。茅葺きのトレーニングコースも同様に、食事付きで 1 週間宿泊しながら学ぶ。

茅葺きのトレーニングは数棟の付属建物とその前の広場、鉄骨とコンクリートブロックでできた広い納屋を利用して行われる。広場には様々な屋根形の実物大の模型が置かれ、実習期間中はその内部は材料の麦藁や葦などの収納場所となっている(写真 4)。これらの模型屋根も老朽化してくると、実習期間中に葺き替えられる。広い納屋には実物大の様々な屋根形の小屋組が置いてあり、実習生はここで麦藁、葦、梳いた小麦藁の 3 種類の中から 2 種類の材料を使いこなせるよう、課題に応じて模型を使って屋根を葺いていく(写真 5~8)。葺き方は 1950 年以降に改良されてきた鉄製のフックを使って材料を打ち付けるなど合理化された方法を学ぶ。

### 3.2 カリキュラム

実習生は新卒が対象ではなく、茅葺き職人として最低でも 3ヶ月、通常半年以上の経験を経て、親方の推薦を得て申請書が提出できる。トレーニングコースの入学申請書類が提出されると提出順に待機番号がつけられる。1 グループ(5 人程度)が 2~3 年間に渡る 12 週間のプログラムを修了次第、新規のグループ入学者を選定するため講師 2 人が申請者の勤務先へインタビューに出かけ、仕事に対する熱意などを聞いて入学者を決定する。トレーニングコースは、茅葺きの仕事が少ない 10 月から翌年 3 月の冬場に開講され、入学後は毎年、実習期間中は 1 か月に 1 週間ナストンホールに滞在して実習を行い、残り 3 週間は親方の元で仕事に従事する。これらを 2~3 年間繰り返し、12 週間のトレーニングを受け、最終週(1~3 月)には筆記試験を受験する。実習期間中には、11 項目の屋根葺き実習課題と 10 科目の特別講義が行われ、それぞれ評価を受ける(表 1)。

実際に実習生を指導する講師は 2 名で、いずれも 50 代の現役茅葺き職人である。茅葺きの地域性についてよく理解しており、講師の一人は 20 代の頃からイギリス全土をキャンピングカーで周り、様々な地域で茅葺きの仕事に携わってきたため、どの地域の実習生にも対応できるという<sup>vi</sup>。実習生は親方から学んできた方法で実際に模型を使って葺くなかで、指導者が随時、基礎的な事項について説明したり、実習生が相互に評価しあって、理解させる方法をとっている。指導者は自分のやり方を一方的に教えるのではなく、実習生たちの出身地における多様な地域性を最大限生かした葺き方ができるよう尊重して指導にあたっている。

トレーニング期間中に行った実習課題は実習日、材料、指導者のサインが入った実習記録と、実習時のチェックリストとその評価、実習写真が各個人ごとにまとめられる(写真 9)。それらと特別

講義の資料そして筆記試験結果などがポートフォリオとしてファイルされ、トレーニングコースからシティ&ギルドに申請して、国家職業資格（NVQ：National Vocational Qualification）2級の証明書を発行してもらう。10月に修了式が開かれ、証明書とポートフォリオが手渡される。1973～88年の間に90名、1988～1994年の間に102名がトレーニングコースを修了している（地方開発委員会統計）。実習生には女性も含まれる。トレーニングコースを修了して10年以上の経験を積み女性親方となり、弟子を入学させてくることも珍しくない。1週間のスケジュールは、月曜日の午後から金曜日の午前中までトレーニングと講習が行われる（表2）。その間、実習生はナストンホールに宿泊し、3食デザートつき、夜食つきの恵まれた環境で生活する（表3、写真10）。これらの食事や宿泊費そして実習費、テキスト代、職場からナストンホールまでの交通費などの全てを含めるとトレーニング修了までには一人あたり10,000～12,000ポンド（約200～240万円 1ポンド＝約200円）がかかる。しかし全額を地方開発委員会が負担するので実習生の負担は一切ない<sup>iii</sup>。政府がこうしたトレーニングコースを重要と考え、全額補助を行う背景には、伝統的スキルを身につけた優秀な職人

表1 実習課題と特別講義

実 習 課 題	材料*	実 習 日	特別講義（水曜日）
1. 軒と表面	CWR	2001. 10	梯子の安全性
2. 軒、破風と表面	LS	2002. 02	道路の安全性
3. 表面材料1	CWR	2002. 09	道具のメンテナンス
4. 表面材料2	LS	2001. 12	現場見学
5. 谷	CWR	2003. 01	救急処置
6. 隅棟	WR	2002. 11	屋根構造
7. 眉形窓	WR	2003. 02	葦と麦藁の栽培学
8. ドーマー破風窓と鞍型部分	CWR	2003. 12	ヘーゼル雑木林理論
9. 前だれと横木準備	CWR	2003. 11	ヘーゼル雑木林現場見学
10. 棟	CWR	2003. 11	葦原の見学
11. 箱型樋と煙突	WR	2004. 02	

\*CWR：梳いた小麦藁（Combed Wheat Reed）、LS：麦藁（Long Straw）、WR：葦（WaterReed）  
3種類の中から2種類の材料を選んで課題に取り組む。  
実習日はグループH Mr. PHの場合で梳いた小麦藁と麦藁を選択している。

表2 1週間のスケジュール

月曜日の午後	実習生が集まり準備を始める
火～木曜日	実習を行う
水曜日	午後7時半から9時まで学科の講義を受ける
金曜日の午前	実習の解体や後片づけ 昼食後に解散し、親方の元へ戻る

表3 1日のスケジュール

8：00	朝食（Breakfast）デザート付き
9：00	実習開始
10：00	ティー
12：45	昼食（Lunch）デザート付き・昼休み
14：00	実習開始
16：00	ティー
18：00	実習終了
18：30	夕食（Dinner）デザート付き
20：00	夜食（Supper）チーズなど

を養成することに対する責任は政府にあると考え、良い職人がいれば民家も良い状態で維持することができ、伝統技術も存続させていくことが可能であるという認識がある。

### 3.3 実習生の意見

ナストンホールを見学した際、2グループの実習生にヒアリングを行うことができた。1つはトレーニングコースの半分程度を修了したグループM、もう一つは最終週のグループHである。グループMは16才で義務教育が修了すると同時に茅葺き職人になった若い10代が中心で、グループHは様々な職種を経験してきた20代、30代などで構成されている(表4、5)。

両グループともに、茅葺き職人になった理由はデスクワークではなく屋外の仕事だからという理由が最も多い。毎日が決まったルーティンワークではなく、現場ごとに違った状態の屋根を葺き替えていく、常に新しいことに取り組むことが要求される仕事に対して創造的であると捉え、やりがいがあり、魅力的だと感じているようである。ナストンホールでの茅葺きトレーニングについては親方も訓練を受けた経験があり、親方に勧められて入学する場合がほとんどである。実習生は、技術面での指導や標準(スタンダード)を明確に理解すること、他の職人と知り合うことなどを期待している。2~3年間に渡る実習期間中に実習生どうしの情報交換を通して、実際に親方を変った者もいる。実際に連絡を取り合うことは少ないが、冬場に毎月1週間滞在する間には様々な情報交換を行い、グループの結束力は強まり、修了後のネットワークを広げている。

ナストンホールに来てからの変化として、実習を通してなぜそうするのか、という理論と理由がよく理解できるようになったとほぼ全員が答えている。そして、トレーニングの最終週Hグループ

表4 グループM (7/12週)

名前(年齢)	Mr. N (18)	Mr. A (17)	Mr. Tob (19)	Mr. J (17)	Mr. Ton (27)
出身地	オックスフォード	ハートフォード	デボン	バーミンガム(デボン*)	デボン
茅葺き職人としての経験年数	1.5年	1.5年	3年	1.5年	3年
前職業	中等教育終了後見習い	中等教育終了後見習い	車販売	中等教育終了後見習い	車販売、精神衛生ケア
茅葺き職人になったきっかけ	野外での仕事だから	野外での仕事だから	野外での仕事だから	野外での仕事だから	野外での仕事だから
ナストンホールを知ったきっかけ	親方も訓練経験者のため	親方も訓練経験者のため	親方も訓練経験者のため	親方も訓練経験者のため	親方も訓練経験者のため
ここに来る事に対する親方の反応	激励してくれた	激励してくれた	激励してくれた	激励してくれた	激励してくれた
何を期待してきたか	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため
来てから、どんな変化があったか	互いの仕事をみながら、どうしてそうするのか、より理解できるようになった 他の親方の情報が入る	互いの仕事をみながら、どうしてそうするのか、より理解できるようになった 他の親方の情報が入る	互いの仕事をみながら、どうしてそうするのか、より理解できるようになった 他の親方の情報が入る	互いの仕事をみながら、どうしてそうするのか、より理解できるようになった 他の親方の情報が入る	互いの仕事をみながら、どうしてそうするのか、より理解できるようになった 他の親方の情報が入る
この仕事を継続したいか、なぜか	野外の仕事で好きだから	野外の仕事で好きだから	野外の仕事だから	野外の仕事だから	野外の仕事で好きだから 外国の茅葺きの仕事が好き
茅葺きの将来はどうなると思うか	仕事が減ることはない	仕事が減ることはない	仕事が減ることはない	仕事が減ることはない	仕事は減らない
親方の年齢	50代	50代	40代	36才女性の親方	40代

Source: 2004.1.14 ナストンホールでのグループM (7週目) に対するヒアリング \*Mr. Jはバーミンガム出身だがデボンで仕事に従事

の実習生たちは、確実に葺くスピードが速くなって効率よく仕事を進められるようになったという。さらに、見積りの仕方や足場の安全性を含めて理解を十分に深めることができ、自信が持てるようになり、職人として仕事を継続していくことに対してより熱意がもてるようになったという。実習生に、将来茅葺き民家に住みたいかと聞くと、とても高価で自分では入手できないだろう、と答えていた。しかし、茅葺きは富裕層が好んで居住するため、将来的にも安定した仕事を得られると認識していた。

#### 4. まとめ

イングランドでは地方の町やその近郊では現在でも非常に多くの茅葺き民家をみることができる。居住者は昔からその家に居住しているのではなく、大都市や町から移り住んだ人たちが多く。茅葺き民家の売買や維持管理のための職人探し、梯子や鉄製フックの使用による葺き替え技術の合理化、茅葺き材料の供給方法など全てが商業ベースのもとに展開されており、葺き替えにかかるコストも日本の約1/5程度しかかからない。また、政府も伝統技術の保存そして住宅ストックを良好な状態に保ち、職人技術の向上をはかるため、積極的にトレーニングの実践を行っている。本稿で

表5 グループH (12/12週)

名前 (年齢)	Mr. M. C (22)	Mr. KH (24)	Mr. PH (37)	Mr. BR (29)
出身地	ダービー	オックスフォード	ハンプシャー	ロンドン
茅葺き職人としての経験年数	3年	3年	3.5年	4.5年
前職業	レンタカー会社	建設労働	調理師 (14年間)	運送業
茅葺き職人になったきっかけ	野外での仕事だから創造的な仕事だから	野外での仕事だから	野外での仕事だから	野外での仕事だから違う場所で仕事ができる
ナストンホールを知ったきっかけ	親方も訓練経験者のため	親方も訓練経験者のため	親方も訓練経験者のため	親方も訓練経験者のため
ここに来る事に対する親方の反応	激励してくれた	喜んで、激励してくれた	喜んで、激励してくれた	激励してくれた
何を期待してきたか	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため	技術・標準の理解、他の職人と知り合うため
来てから、どんな変化があったか	速く葺けるようになった仕事の効率がよくなった互いの仕事をみながら、どうしてそうするのか、理解できるようになり、自信がついた他の親方の情報が入る	速く葺けるようになった仕事の効率がよくなった互いの仕事をみながら、どうしてそうするのか、より理解できるようになった他の親方の情報が入る	速く葺けるようになった仕事の効率がよくなった葺き方だけでなく、足場づくりの規則などもより理解できるようになり自信がついた他の親方の情報が入る	速く葺けるようになった仕事の効率がよくなった互いの仕事をみながら、どうしてそうするのか、より理解できるようになった他の親方の情報が入る
この仕事を継続したいか、なぜか	野外の仕事で創造的10年後は親方になりたい	野外の仕事だから	野外の仕事だから	野外の仕事で、いろいろな場所で仕事ができるから
茅葺きの将来はどうなると思うか	茅葺きの数はもっと増えて仕事も多くなると思う	茅葺きの数はもっと増えて仕事も多くなると思う	茅葺きの仕事が減ることはないと思う	茅葺きの仕事が減ることはないと思う
親方の年齢	39才	43才、40才	60代	40代
今の親方を知ったきっかけ	親方はいとこで20年以上職人をやっている	親方は兄弟で会社経営。お婆の家の改築現場を手伝っていた時に親方と知り合った	不明	ナストンホールに来てMr.KHと知り合い、今では彼と同じ親方についている

Source: 2004.2.6 ナストンホールでのグループH (最終週12週目) に対するヒアリング

は、そうしたトレーニングにより、技術の合理化やスタンダードを確実に身につけた人を育てることによって、茅葺き民家を良好な状態に保つという物理的な効果があるだけでなく、国家資格を与え茅葺きという職能を高め、茅葺き民家に対する信頼性を高め、貴重な文化遺産である茅葺き民家を維持管理していくシステムとして有効であることをみてきた。イギリスでもイングランドにしか茅葺きトレーニングのスクールはないが、近年欧州でもトレーニングを行いはじめたところもある。日本では使用する材料や葺き方などで異なる点も多くみられるが、日本の茅葺き民家を維持管理していくためのシステムを考察するには、示唆に富む点も多く、さらに考察を深めていきたい。

#### 参考文献

- (1) James Moire and John Letts (1999) English Heritage Research Transactions Thatch Vol.5 Thatching in England 1790-1940.
- (2) Jo Cox and John Letts (2000) English Heritage Research Transactions Thatch Vol.6 Thatching in England 1940-94.
- (3) 安藤邦広 (1983) 茅葺きの民俗学、はる書房
- (4) 伊藤ていじ・高井潔 (2003) 屋根
- (5) 田中麻里 (2000) 茅葺き民家の維持管理と再生システム—京都府美山町の事例—、群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編、第35巻、pp.283-298
- (6) 原田多加司 (1999) 「檜皮葺と柿葺」学芸出版社
- (7) 日塔和彦編著 (2000) 「ヨーロッパの茅葺きとその技術」欧州茅葺き視察研修報告書刊行会
- (8) 勅都市農山漁村交流活性化機構 (2004) 茅葺きの民家 全国調査報告
- (9) 日本ナショナルトラスト (2000) すぐれた自然環境としての草原・茅場の保全活用調査
- (10) 日本ナショナルトラスト (2002) すぐれた自然環境としての草原・茅場の保全活用調査III

- 
- i 日本ナショナルトラストは2000年から3年間で「すぐれた自然環境としての草原・茅場の保全活用調査」を実施し、日本各地の草原や茅場の現状と維持管理体制について報告している。また2003年10月には「里山・水辺の保全と茅葺き民家-草原・茅場の保全活用を考えるシンポジウム」を開催し、水辺の保全と草原、里山としての茅場について話題提供している。日本ナショナルトラスト (2000) すぐれた自然環境としての草原・茅場の保全活用調査 (文献9、10)
  - ii 1979年に設立された社団法人全国社寺等屋根工事技術保存会は、社寺等屋根工事の伝統的技術の保存と、社寺屋根工事技能者の養成研修及び文化財修理用資材の確保等を行い、我が国の文化財の保護事業に寄与することを目的としている。主な事業として、社寺等屋根工事の伝統的技術の保存とその研究向上、社寺等屋根工事の技能者の養成研修、文化財修理用屋根葺資材の確保を行っているが、国の補助金などを原資に1980年より、北は福島県南会津郡下郷町の大内宿から南は宮崎県えびの市えびの高原まで茅葺き民家を守る拠点として、茅の原材料収蔵庫の建設を全国的に展開している (文献6)。
  - iii 文献5
  - iv 文献1、2

- v 文献2、p.5
- vi 文献2、pp.33-36.
- vii 講師の一人である Mr. Roger Evans へのヒアリングによる。
- viii 2004年からは、25%（約2,500ポンド）を実習生の負担とすることになるという（Mr. Roger Evans による）。



写真1 梳いた小麦藁を使った葺き替え  
はしごをかけて屋根にのぼり、束ねた材料をほどこいて整えていく



写真2 梳いた小麦藁（左）と葦（右）



写真3 ナストンホール外観  
（旧アークライト卿の邸宅）



写真4 いろいろな屋根型が置かれた付属棟の中庭



写真6 谷部分を葺く



写真5 異なった部分を葺く2人の実習生  
(梳いた小麦藁を使って、それぞれ谷と棟の端を葺いている)



写真7 葦を使って棟端を葺く

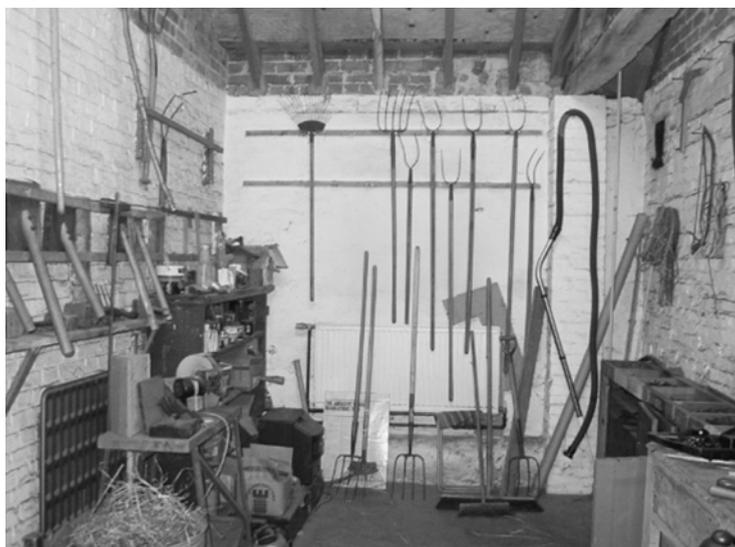


写真8  
実習場の中の道具置き場

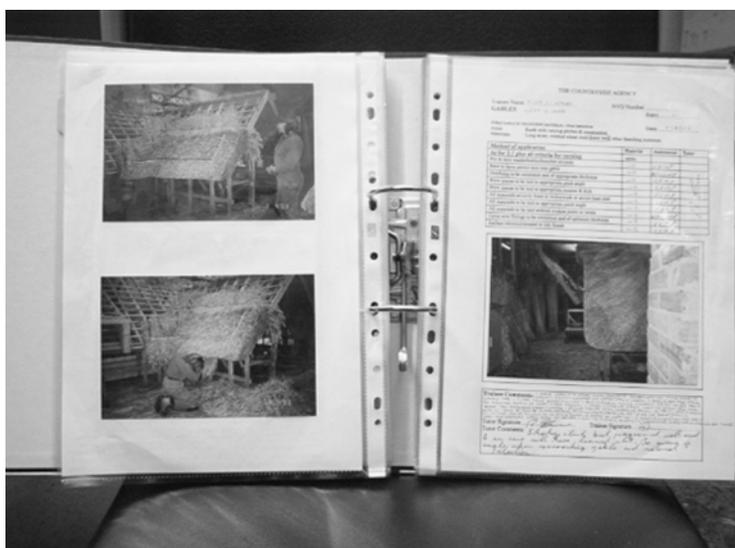


写真9  
実習生のポートフォリオ  
課題に取り組む実習生の写真  
(左)とチェックリスト、評価、  
実習生の感想とそれに対する指  
導者のコメントが書かれている  
(右)。



写真10 昼食後にトランプをする実習生

